

風景を失うことの意味

——陸前高田と原風景をめぐる——

熊谷圭知

原風景としての陸前高田

今回の津波で甚大な被害を受けた陸前高田市は、私の父の生まれ故郷である。子ども時代は、毎年盆になると陸前高田を訪ねた。

祖父の家に、叔父叔母や従兄弟たちが勢ぞろいし、墓参りに出掛ける。セミの鳴き声が降りかかる林を抜け、重箱に入れて持ち寄った煮しめや赤飯などのごちそうを、駄菓子と共に墓に供える。墓参りが終わると、たいてい誰かの車で海水浴に出掛けようということになる。行き先は、叔母夫婦の住む広田の海水浴場（大野湾）か、高田松原（広田湾）だった。海の水は広田のほうで透明できれいだった。水中眼鏡がなくても、水底の貝殻がきらきら光った。岩

場には、ムラサキイガイがびっしり張り付き、父が素潜りでアワビを獲ったりもした。砂浜から歩いて堤防を越え、道路を渡ると叔母の家があった。井戸で水をくんで砂を落として、五右衛門風呂に入り、夏は民宿も兼ねる広い叔母の家の縁側でスイカを食べた。

砂浜は高田松原のほうはずっと大きく立派だった。広大な松林が、半島の端まで気が遠くなるほど長く連なり、砂浜にはピーチパソルが花を咲かせていた。浮輪やビーチボールを売る店があり、



▲写真1：高田松原と私の家族の記念写真（2010年11月撮影）

イカやホタテを焼く匂いが漂ってきた。熱い砂浜をただで歩き、売店でアイスクャンデーを買ってもらった。

私にとって陸前高田の原風景だったこの二つの浜は、もうこの世に存在しない。

二〇一一年三月十一日午後、繰り返し押し寄せた津波は、高田松原の七万本の松林を押しつぶし、堤防を軽々と越えて、陸前高田の中心街とそこに暮らす人々を飲み込んだ。かつて街だった空間には、今では瓦礫は取り除かれ、コンクリートの建物の廢墟だけがぼつりぼつりと残る、荒涼とした風景が広がっている（写真2）。

広田の砂浜も消え、叔母の家の跡ももうどこだかわからなくなっていました。叔母は裏山にはだして逃げて無事だったが、足の悪い叔母を案じて仕事先から車で家に戻った叔父は、津波で命を失った。

気仙川をさかのぼった津波は、江戸時代からの老舗の商店が並ぶ気仙町の街並みをなぎ倒して遡上し、山に囲まれた河畔の家々と、こんな所まで津波が来るとは夢にも思わなかった人たちまでも押し流した。

「高田は海も、川も、山もある。素晴らしい所なんだ」というのは父の口癖だった。アユが上る清流である気仙川は、山からミネラルあふれる水運び、カキやホタテやワカメの養殖が盛んに行われる豊かな海を生み出していた。近隣の気仙沼や大船渡では、山が海に迫り、深い港をつくり出して、遠洋漁業が発展した。一方、陸前高田は、気仙川がつくった沖積低地で、低平な市街地が広がり、広い砂浜もあった。しかし、今回の震災では、その豊かな自然環境が仇（あだ）になってしまった。

牙をむいて押し寄せてきた黒い海に、家族や知人、家や財産を奪われた人々が、果たして再び波の音に安らぎを覚えることはあるのだろうか。失われた陸前高田の街並みや海は、再び人々の共通の原風景となり得るのだろうか。



▲写真2：被災後の陸前高田の街並み（2011年7月撮影）

人間の成長と原風景

私は、お茶の水女子大学の授業で、いつも「原風景」というテーマを取り上げて話をする。「原風景」とは、自らの人生体験とかかわり、繰り返しあるいは時折、強い感情をもって喚起される風景、と定義しておく。

文学評論家の奥野健男は『文学における原風景』の中で、作家にとってその文学の母胎となる原風景が幼少年期と思春期とに形成されるとし、前者については、生まれてから七、八歳ごろまでの父母や家の中や遊び場や家族や友達などの環境によって無意識のうちに形成される、と述べている。私が授業でお茶大の学生たちにそれぞれの原風景を尋ねた結果でも、保育園・幼稚園から小学校低学年くらいまでの時期が、原風景形成のピークを成していることがうかがえた。

お茶大生の回答の中で特徴的なのは、原風景の具体的な場所として、「田んぼ」「野原」「川・小川」「木・藪・林・森」といった自然にかかわる風景を挙げる

景が登場してくるのは驚きだった。そこには、お茶大生に割合、地方出身者が多いということも影響しているだろう。彼女たちが生まれ育った環境に、比較的自然が多く残されていたことに加え、彼女たちが、故郷を出て、自らの生まれ育った風景から離れることによって、現在の東京の風景との対比において、自然が故郷の表象として顕在化したのかもしれない。しかし、都会に育った学生でも、夏休みに訪れた祖父母の家やその周辺の風景を原風景とする者が多かったり、近隣の公園の中で、設えられた遊具よりも、周囲の茂みや藪が原風景となったと答える者があることなどから、自然的な風景が人間のまなざし・感情や行動を呼び起こし、原風景として刻み込まれやすいといえそうだ。

失われた原風景と私たちの課題

陸前高田のように、自らが慣れ親しみ、愛着を覚え、帰属意識を感じていた風景を根こそぎ奪われた人々の心痛と、その喪失感、計り知れない。今まで慣れ親しんでいた自然が自らに敵対するものとし

者が多いことだ(もちろん田は人工的な構築物だし、野原や森も含めて、われわれの周りに人間の手が入らないという意味での純粹な自然はもはや存在しないから、ここでは人々が「自然」と認識するものという意味で使っている)。

「田んぼ」は、幼いころの思い出の風景であり、あるいは現在に至るまで存在する故郷の風景の象徴である。それは眺める場所というよりむしろ遊び場であり、季節感と結び付いて語られることが多い(田の緑、刈り入れの時の黄色の稲穂、冬場に水が抜かれた田んぼで遊んだこと……)。「木」は家の窓から眺めていた柿の木であったり、その上に登って基地を作って遊んだ木であったり、子どもたちの間で怖いうわさのあるクリの木であったりする。「藪」や「林」は、仲間同士の隠れ家的な遊び場ともなる場所である。「川」や用水路といった水にかかわる原風景も、その中に入って遊んだ思い出や、そこに浸した手の感触とともに思い出されることが多い。

私にとって、一九八〇〜九〇年代に幼少期を過ごしたお茶大生の原風景にここまで自然にかかわる風

て現れてしまうことの衝撃は、人間にとっていかに大きいものなのかは、想像を絶する。

震災からの復興を語る時、経済的な復興や、インフラや施設など土木工学的な側面に、注目が集まりがちだ。しかし人間の成長にとって風景が大切な役割を果たしているということを思い起こすならば、人々の心のよりどころとなるような風景をどのように取り戻し、あるいは新たに創り出していくかも大切な課題になるだろう。

私がお茶大生の「原風景」を考察して見いだしたのは、原風景の形成の契機には、3つの心情・心性が存在することだ。第一に、「温かさ」や「安心」の感情である。これは家や家族に囲まれ、守られているという感覚がもたらす、いわば原初的な感情であり、時間的には幼少期、空間的には「家」とそれを取り巻く家族の思い出を原風景とする事例に見られる。第二に、「自由」や「解放」の気分であり、これは逆に、大人の束縛を逃れ、自分たちの遊びの世界を獲得した時に生まれる。近隣の仲間との遊びの中で現れてくるものであり、成長による行動空間の拡

大に伴っている。

そして第三に挙げられるのが、「寂しさ」や「孤独」、「不安」の感情である。親から離れている寂しさ、形をもたない漠然とした不安や孤独感、さまざまな苦渋を伴う強烈な体験、そして思春期に見られる将来への痛切な不安に至るまで、こうした感情は、時間・空間を問わず、原風景形成の一つの底流を成している。^ま

原風景とは、決して単なる懐かしさや幼少期の幸福な記憶によってのみ彩られるものではない。原風景が「不安感」や「孤独感」を伴ったり、あるいはそうした風景が、物理的にあるいは精神的にもはや手の届かないものになってしまったという「喪失感」と結び付いても形成されるものであるとすれば、今回の震災は、一人ひとりの心の中に、逆に失った風景を原風景として強く刻み込む契機ともなったのかもしれない。

これからこの地で育っていく子どもたちにとっての原風景を考える時、いくつもの問いが浮かび上がる。高田松原のように、世代を超えて原風景として

共有される場所を失ったことは、街の復興にどんな影響をもたらすのか。仮設住宅の画一的で狭い空間は新たな原風景形成の場となり得るのか。慣れ親しんだ場所を離れ、家族や友人、学校や地域を奪われた子どもたちが、どのような心情とともに原風景を刻んでいくのだろうか。それを検証していくことは、これからの私たちに残された課題である。

(お茶の水女子大学)



▲写真3：高田松原に残された「希望の一本松」(2011年9月撮影)

注

- 1 奥野健男「増補・文学における原風景―原つば・洞窟の幻想―」集英社 一九八九年 p.55
- 2 熊谷圭知「お茶大生の原風景」お茶の水地理 一九九七年 pp.35-51
- 3 注2に同じ
- 4 同注2 p.43